九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

中世歌学書に見える言語意識の性格

佐田, 智明 九州大学大学院学生

https://doi.org/10.15017/12354

出版情報:語文研究. 6/7, pp. 29-39, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会

バージョン: 権利関係:

中世歌学書に 見える言 語 意 識 性 格

田 智 明

収本三十一頁) 志与,|奈利 | 寛和歌合惟成持。或不、病ども是等は病なり。 極御息所歌合勝。 介礼与;|介留;|徽子女御歌合中務持。良 八雲御抄によると、次の如き説が述べられている。 同事の詞かはりたるは、尤可、為、病。良牟与,,礼牟,京 (久曽神昇氏「校本八雲御抄とそ の 研 究」所

さすものであるが、公任の「ことばことなれども心 おなじ 右の例中の「同事の詞かはりたる」は同 義異音の場合を 脳

などと誌されている事をもってその間の事情が知られる(ほこ) や、奥義抄に(巻一、十八、避」病) きを猶去べし」(占典文庫、公任歌論集所 収 新 撰 髄 古式之趣如ゝ此但近代用る所の歌は卅一字同心の 病はか

> 問題の歌を求めれば、 今、堀部正二氏の「纂輯類従歌合とその研究」 ちはやぶるかみもしる覧かすがの、わかむらさきに たれ題の歌を求めれば、「れむ・らむ」は、 を参 照して

かてふれむ(延嘉廿一年京極御息所歌合)

花のねぐらもうご かさる

状況を考え、もし可能であれば、 である。こゝで吾々は両例の語が各々同義語と見倣された るてがかりを得たく思うのである。 と決める前に、中世歌人の言語把握の態度及び文語把握の 中世人言語意識の型 を知

次の如く展開する。即ち、永縁奈良房歌合(大治二年)に、 そこでまず歌合の例をもって考えてみる。 方法として

秋 の 湞 明 浦 はな びきも にすむわ れ からの 数も見

(3)

の歌の 判 Ιζ

۲ とは只今までは見えぬにや。 れ なし。 も心えず。 数も見えけりとこそいふべ 校拿書類従八。 五五五頁以下摹八55 いつ見るべきに け れ か 見 と略 つべ おぼ

(4)

を集めて、 たと考えるとすれば語法意識の問題となるのである。 右 の方法によって判詞から所謂テニヲハに相当す る部分 当代の文語法体系をうかゞう事も不可 能 では 13

1 いと思う。 Ė 光やといふやの字や見ずして思ひやれる心地 すらむにみが風にきたなびく花よりも光や増る 朱の 玉が 社歌合、 後成判、 **黎**八 701

かりていはむてゝろなるべし(住吉社歌へおきならはしたる心にはあらず侍るめれ。 の かり庵。 とゝろあれやとおけるやの字とそふるくかきなくらしそはつ時雨まださしはてず (住吉社歌合、 てれ 後 は時雨を 成判、

2

ゝろあ

れや。

字如何。所」謂不」の詞に用ひ侍る、 ことばは大原やをしほの山、 九 27.4 初五 風 「文字」やの字たがひ や霞ふきながせ吉野 所」謂不」知,|歌趣| 吹き流せといはむ上の 歟 Ш 春やとき花や遅きと此 てきこゆ。 しらゆ (石清水若宮歌台定家判 à 花 やの字 句 の色ぞくも にはや「の」 を **つかふ**

ŋ 歌合、 右申云、浮きぬる心やとこそいはまほしけれ、〈俊成〉君がりと浮ぬる心迷ふらん雲はいく重ぞ空の通路、 りけるにか。 といはずともかくてありぬへし(六百番歌合、 此歌にあはず聞ゆべきが故に、 云、左の浮きぬ (右方申云) わたつ海の波 誤りて此 岩波 3**2** 3 (判云)…又「海原の」海原やた下句にの文字も多かり海原やとは、 0 歌 のあなたに人はすむ心あらなん る心は迷ふらしなどいふべかりけるを、 はのにてあるべ 迷ふらん しと見え 海原やたゞ同 といへる、 たり (俊成) 岩波 など 風 Ø こなか 通路 百番 事な

(5)

伝に関するものである事は想像に難くない。雨をかる」「らんにつゞけるや」「ののや」等に関する種々の場合があげられており、「思ひ 右はやについての例であ 波大概抄の「屋字十品」 に程遠い 定家判の歌合中のものである。 Ď rj ずれ 例③の「や」の二用法は手か が 両家の も後世信 判 奉された 詞 やるし 中に てに は、 は秘 俊

けれども、 やに関連した語にかがある。判詞には見出し得 なかった

也。占語了躰也。(顕昭、占今集註、続々群十五16)ヲ其敷ナドトフニハアラズ哉トイフ詞ヲイ ヒ サ シ タ ルシカモカクスカハ然モ隠也。占語也。此カトイフ字ハ物

次に「らし」「らん」について考察する。前述の例④にしている。 している。 しまると、かは「問フカ」であり、哉をもって咏 歎を代表化。占語ノ躰也。(顕昭、占今集註、続々群十五16)

成判の六百番歌合にも、であろう。「らし」を古語とする事公任以来であって、俊であろう。「らし」を古語とする事公任以来であって、俊であり、古風の躰の歌にふさわしい語である事をさ すもの

る。

「此歌にあはず」云々とあるが、これは、「らし」が占語

の山に紅葉散るらしなどいふに似ざるべし(岩波スヤーストン・・・(判)音羽の山関の小川らしに不及にや。 彼のみむろ紅に関の小川はなりにけり音羽の山に 紅葉 散る らし…

上下句のかけあはぬのを嫌ったのと同様である。こ云い、俊成らが歌の躰と用語との不調和を嫌ったの は、の山に紅葉散るらしなどいふに似ざるべし(岩波17~17)

の著靴したらん心地し侍るめれ(六百番歌合岩波 ユタ)上句より風のねたさまでは近き歌の体なるこそ布衣 の人左歌猶しかずけりなどいへる古風の躰にやと見ゆる を、

める。 た一方、らしがらむに置換されて死語化する過程を 知らした。即ち、らむが疑問としてやと呼応させる表現 法が存しし、方人は、らむを見て疑問と見、 や 字 な く てはと難じって、らむをらしに近いと俊成は考えたのであろう。 しかえたのは歌躰によるとしても、その場合のらしは推定で あえたのは歌躰によるとしても、その場合のらしは推定で あ 右 られるから、 において、現在推量のらむの意義がうすれていた事が 考え 「ラムト云フ詞ハマサシクアル事ニモヨムナリ」(羣十三宮) は やゝ以前の例と見られる拾遺抄注(顕昭) 例 にすぎない。さて、 右の事実はかなりの必然性をも その場合のらしは推定であ 例④の場合らしをらむ つと見られ)所引 の に変

等について見る。 次に、「し」「ぬる」「つる」(すべて助動詞 連体形)

→ 知らざりしわが恋草や茂るらん昨日はかゝる袖の露か

今朝までもかゝる思ひ

はなきも

のをあはれあやしき

ふべからずや。かゝる思ひは無かりつるものとぞあ る判云、左歌かゝるの難可然か。右歌かゝりつる とはい云、右歌今朝までかゝりつるとこそいはまほしけ れ。云 方申云左歌かゝりしとこそいはまほしけれ。 左方申の上かな(右歌)

213

そぬるとは侍らぬにか。行くにては一夜の事とも覚えり行く……惜しからぬ身ぞ惜しくなり行くといへるこ 命か は逢ふに心やかへつらん惜しからぬ身ぞ 惜 しくな

(≡) 侍らず 紅葉は……家隆卿云(中略)しぐれし山 たえだえにしぐれし山の雲なれどそれも残さぬ 四方の (同 のといへる 岩波 2 43

せぬやうにや聞え侍らむ。しぐる(る)と侍るべきにや紅葉のさかりにこそは時雨もことに侍らめ。今は時雨 (「蓮性陳状」所引蒙十 43)

(四) 山越え……左はみる程にとやいふべからむ。し桜ばなちり初めしまでみし程になぬかになりぬ

(II) あかなくに我がしめし野の女郎花とゝろ許さぬ人 にを ては少し事たがへるにや (俊成判民部卿歌合 羣九 19)

の字に しがの

ろう。

見てこそあかなくとも思はめ、何を見てかはじめ「け」、、、、らるな…… 我がしめし野のとあるこそこゝろえね。花 とちがひてなむ覚ゆる。 しめつるとあらばこそ心にかなはめ、言葉「と」心

(顕季判、 六条宰相家歌合、墓八 51)

うちけれとやよむべからんとぞみえはべる。今まにあ ふかみよ風はげししむべしこそよむの里人衣 うつな る詞也。 へしこそと読る、おもふべし。さすがによむや 此歌にはかなはずやあらむ、せめて は衣

(4)

秋

風も寒く吹なへにころも打也などよまれ侍るべき。 たりて風もはげし、 衣をも打をきってよむならば ょ

(東塔東谷歌合、永長二年**な**八 2

る。今朝までに対しつると置くのに対して、昨日に対し例)には「し」「つる」の区別が示されていると 思わ とおいたものである。「し」が過去の事実をさし ぞ現

経験を示す。例口はぬると行くの区別である。「ぬ「し」では花を見ない事になり、「つる」とあるに 関しない例は巨四にも見られる。しかし田の顕季の判 詞 一夜の事」とある事から完了の意にとるのが穏やかで あ 「ぬる」は よって は

例を加えテニハに相当する部分について言う 所 を すのも王朝期の文語を伝えていると見られよう。 に正している。ちなみに、「きゝてよむ」を「な 又、例内では「きゝてよむ」意がない故をもって「けれ_ 以上は俊成、 定家の判詞を中心とし、他の歌人の り」で示 挙げ、 判詞

が、とりまとめて次の事が考えられる。 少くとも中世初期歌人にあって は 文語 把 握が多少の

それらの語中に見える言語把握の概況を調査したのであ る

のであり、 時代の反映はあっても、 大体において、正しい用法を指適してい ると かなり深い所まで観察している

② 字という名のもとにテニハが正しく語としてと りあげみられる事。

られておること。

Ξ

る定家の僻案抄であろうか。 この期に求める時、最も適当な書は、やはり俊成庭 訓によ次に註釈の類を考えてみる。注釈における対言語 態度を

(用語) (訳)

1. ひちて――ひたして 此の詞むかしの人 このみよみ

む(同119) ことにしたがひて此のごろもなどかよ きざららむ----見らむといはば文字多かれば見らむとよ めり、

2.

き歌を多く見て言葉つかへるやうは心うべしきなくなどいふやうなる詞なり(中略)ふるあやなし――あやなしとはたとへばかひなき事 をあぢ

すると、

• 6) 僻案抄の註釈を教長註の古今集や顕註のそれ と比較

3.

る文字をそふるなり(同180)れば加ふ(中略)占き歌にはかくいたづらなたれしかも――誰か→誰かも→誰しかも。文字少なけ

4.

(同 180

とをつくり出すなり(同18)がくやすき事をもならはであたらしく万のてがは、みなあまねくしりたるを近き 世よりあやめ----昔の人中頃まではつねにかやうにいふ 詞な

5.

なむ(同 187) ひならへる事ならねば責来(けむ)にて ありせめきけむ――せめく(毛詩)。此の詞つねに人 のい

6.

の間隙ば休め字、相通、広略、助ヶ詞で説明される(例4る例であることは明らかである。②これらの占語が歌体にる例であることは明らかである。②これらの占語が歌体にる例であることは明らかである。②これらの占語が歌体にる例であることは明らかである。②これらの占語が歌体においまっては今後も使用こるべきものである。公任も「かよっては今後も使用こるべきものである。公任も「かよっては今後も使用こるべきものである。公任も「かよっては今後も使用こるべきものである。公任も「かよっては今後も使用こるべきものである。公任といる事を知る。従って当時代にない語は類似語をもって代用し、その間隙は休め字、相通、広略、助ヶ詞で説明される(例4

メド(顕註)(16) -→アランズラメドモ(教長註)(28)有なめど-→あらむずらめど(僻案抄)(11) →アラムズラ註)(10) テシガ→バヤ(教長註)(31・76)

考えられるのであろう。という事は註釈によって常用語の の如く、 異説のない場合テニハに関する部分の訳が一致す 相互の影響関係以上に常用語で訳したという点が

状態がある程度まで知られる事を考えさせる。 にある由緒詞の例は、一語一義であり、個々の歌の註 釈と かし、同じ歌学書中の註釈においても、清 輔の初学抄

故に相通などによって割り出された二つの語が同じであっ 語法的な正確さも失われてしまう。 る例が多く、従ってテニハの類は無視されがちとなる 故に 博士がふれられたように古語を漢字の表意性に頼って 訳す ちがって総括的な訳語を必要とするから、かって時 枝誠記 にもあるのであって、両者の差は程度の問題に過ぎない。 この傾向は一般の 歌書

和歌大綱

たとへば谷ふかきとあらんに こはく 聞えば

て同じでないという場合があらわれる。 は次の如くである。 一例として「=-み」をあげることにする。 中世にわたる例

(仲実) 人詞部 ベみ ベ 、しとい ふ事なり (続

羣

連歌論集上 27)

十七 98

袖 歌初学抄 (顕昭) 卷十三 系二221 (清輔) 由緒詞 べ 2 べら可之 1 ベ しとい ベみ同 ふ詞 (歌 学大 (歌 学文

庫壱 170 (上覚) 上、通用名言 山たか み 谷ふか 7

此

しとすることは危険である事、

後半においてふ

かみ対ふか

みはしといふ詞也。 (歌学大系三 15) みとしとは べら可べみ同 同じひゞき也。

(順徳院) 言語部世俗言

(久曽

後撰集正義 神氏校本 べみとはべ しといふ詞也 (続羣 十六 624

古今集註毘沙門堂本タカミトハタカシト云也、 シトミト ヌキウスミ→ヌキウスクシテ (同34) 同ヒ、キノ字也(未刊古文古註釈大系四4) сſ

烏丸本悦目抄 たにふかみとたすくべし、指合ふ事あらば谷ふ かきともあるべし、(歌学大系四 谷ふかきとあらんはこはくも聞えとなり

片端 (専順) もさしあふべくは谷ふかみとかゆへしみときと も心にあはぬ時みとは 置くべきなり (岩波文庫 は同じひゞき也(十八ウ、国語学大系十四巻) 寒く、寒き、遠くとをきといへばいづれ

春樹顕秘抄十八、たすけ字の事、谷ふかきとい 前半期においてべみがべしと置かれているのをべみ 同じひゞき也(国語学大系十四巻) きこえ侍らねば谷ふかみとかゆる也。 きとみは は 6

現面 単ではないのである。 の上での発言である如 「こはく」「指合ふ」 関係に似ている。 即ち、 Ø 3 、思われ 用語は一見歌体に関係 能きてえ るが、 ---\$2 題 心はさほ 12 した表 あ ど簡 は

-期の間 0 成立

れる。 背景が必ずや存したものと思わ 結ぶのが普通 集には稀であり、 説が意識的に表われてくるのは、 という一節があ れる。 あろう事は先学の説く所である。 けり」のある面をとらえていると思われる。 験的とに分って、 みらるゝも此しの字のかはりめなるべし 実なり、若人にしられぬ私集などを撰み置て 侍 の事書にはよみ侍りけるなどかくべし、是一ふ しと書べし、 詞書の終りに、 後に人のみて此集の撰者は、 撰 者の歌を入るゝ事 書 しか 「ける」 して室町 であったのを、本書の記述者は、体 験的と非 b しの字かならずおくべし、 撰 者の作にても「ける」「る」「侍る」で 「治定」更には「現在の詞 敢て故実と云った。この二分は 、右例の如く「し」を用いるの「し」「ける」の用法上の 区別 期 べにお 7 て共に口 には、 れる。この「し」 それを要請すべき言 語的 此作者にてあ りけると 一し」一ける」 3 づれ から 遠ざかった (羣十三 さらぬ人の の時よみ この ような ا ع 区別が見ら は しある故 らむ 0 して扱 7 は勅撰 **558** 過 侍 去 を 歌 h

> の間には意味的な聯 に聯関させて考へた」 ついて博士は彼らが 又相通と本韻に関する説にも共通点を有してい VQ 時枝誠記博士の国語学史(六〇頁)によると、「むばたま」 ばたま」に関 して、歌学上重視された問 繋があるとい 「むぬの別を髪と夜との二の語の意味 旨述べられ、「これは語とそれの記載 ふ考方によるのである」 題があり、 れ

12

類似 信 の場合として、 いきかへり(蘇生) 袋草子所引の後拾遺問答 ゆ ŧ かへり(往還 17

と云うのも挙げられよう。

通

俊

いきかへり

往. 還

196

とされ

合があ 博士の御研究がある。仙覚は ウ・ヌ・ムを相さて、ヌバタマに関して想起されるのは仙 例はその逆で、往 語類義語 分解•註釈 たと思われる。 周知の事実で、先験的言語の意識はとにかく、音義 て、語法体系にては差があったもの 「ウ=」を本源的な形とした。 と語法体系とにはずれ ŋ は、 八雲御抄のらし・なりは意識的には同れる。従って、同じ事と註されるのにもい、何らかの方法で区別しょうとする意 • 理解に見られる如く、音形式を異にする (i き・ゆき)も同 があると見なければなら ウ・ヌ・ムを相通としなが 悉 様と見られる。 ^如く、一方ウバ 学の応 用であ 覚抄で、 じとされ 頹 識 的 お語法 タマの ない。 も存 な語 への場 同 0 は 6

になる。 必ずしも一致しないとすれば、 前述の如く語法に関する記述が、把握された語法 当然文語修得の方法が問 体系と 題

手爾葉大概抄に

学フ者ハ先達ノ秀歌ヲ以テ敢テ自得スルニ勝ヘズ 併シテ達人之ヲ善クスルハ鬼神モ之ニ感ジ葉涙之ニ出

或は宗砌 ・砌塵抄に

て知るてにをはも候也(岩波文庫・連歌論集上器)へによるべからず、我と吟じ合て可然事也。但な へによるべからず、我と吟じ合て可然事也。但 ならひ大かたてにをはの事は調子にたとへ侍なり。人 のをし

する。 も要するという。更にてにはの修辞的内容も加って、完は修得の困難性をいい、てにはは体得すべきもので伝受をでにはの内容は時代・論者によって異なるが、右例はてにて、のの、 と思う。 にてにはを修得した人がよく歌えば鬼神も感じさせると。。。 前述判詞例似不」知川歌趣 | 敷も同じ考えに出るもの

具体的な例を挙げてみると、こその結びの問題が 古曽者兄計世夫禰之通音志志加之手爾葉・尤之詞受っ下 先ず大概抄に 興味深

留之。

とあり、宗祇の抄之抄には、

そ思初しか我こそ下に思ひしか(II) ししかのてにはとは、こそうれし、 ゥ こそあり Ų

ے

と註 古今 187 している。古例に徴すると、 註古今集、巻十三、続々羣 10 にもその由見ゆ) あきこそかなし (清輔本・崇徳院御本)

(顕

があり、「し」を回想の「し」とすれば 後撰 455 ふりてこそこし、 もみぢばはをしき錦とみしかども時雨と共 (浄弁本、関戸本は「ふりてゝそ

r

とし」)

拾 遺 57 2 木たかきかげとあふか れむものとこ Z

(長歌)

(詞の玉装

緒、

巻五参

などあって、かなり古い時代から変格の例をもっている。

このように宗祇が抄を書いた頃、一条兼良が りなきよはひありとも君をこそ知る 人にせむ 庭

のた

について、

ま松 限

七日歌合) 知る人にせめとあるべきにや (墓丸 67) (文明九年七月

といつたがこれは秘伝にいう「第四の留り」に関する。

彼

判を加 釈の類を資料 以 伝中に含まれていることは勿論であるが、こゝに られる。 伝の類が古来の歌例、及び定家などを中心とする判 的に文語 として考えたのであろうか。 取上げられた う事である。 るのは、 つ点において、 があり、 のみならず 前 17 えた例は管見に入らず、むしろ、問 「こそ」の係 誤用とはいっても、和歌実作上 に作用する事になるのであろう。 伝の 双方が 次 のは、 にする事から、 |判詞自体に誤用がある) と思わ いの例 国語史上の語法変遷をふまえていると考 記述と実際に体得された文語との間にもず 互に影響しあっていたのではな 兼良の修得した文語体 系に反するも 結について変 秘伝が誤用の 従って手爾葉秘伝の類が 格 0 の修 例などは 題にされ しかし、同 可能 辞的 れるが、こ 性の上に立 な内容が秘 15 想 見 かとい 巡起され 時 詞 えても こと • に · D え 註 秘 0

Щ おもひがたし云々(一条兼良判、 げかな ፟፠ かみ 文明五年) (羣九 さしもいそぎし夕ぐ (判云) 夕ぐれをいそぐ心 649 れをこの 按察使 頃 以親長 ŧ しらぬ 卿 故と 家歌 花

П もひけむ ふかく我が 一きなりし 心にそめしもみぢ葉を時雨 万申 芸 式 :: そめしの過 染めしの過去 去の詞、 0 のみとは in 聊 誠 17 思 ひた 左 何 お

まさるべきもいかゞ、 (羣 匈)(文 明十年事は侍るべし、心の染まるばかりにて、紅葉の 色の難におち侍るべし、又露霜などは しぐれにあいそふ

八月二日歌合、兼良判)まさるべきもいかゞ、

ुऽ 問題を惹起したものではなかろうか 前述の如く、 山 口、 作者がどういう意識でもって詠ん ふかみ 例のようにしを過去という事姉 が 深み→深し(き)では解せられぬ所に奇 理由 を表わすと見れば兼良 ケ小路系秘伝に だか不明ながら Ø 難 は あたらな 見え 妙な

辿った道と似ている (註人) たと考えてもよいであろう。 。 較 し ない。これはしが形容詞語尾し•べしのしなど、区収)にもそれらしいものがあるから更に遡るもの か 詞、 必要から生じたもので、 古今秘註抄 る例が古い しが中世 ところでし--過去とおくと回想のし 必ずしも合致し 愚秘 て説 く時 抄の Y であろう。応安新式に例が 0 (鎌倉末までの成立、未刊国文古註秋大系 四所 2目から見て過去らしきものに移行しつゝあっれおむね正当な見解に達している。 とも あれ し等個人差がないとは云えぬが、 ない 仏説の過現来を受けたもの のも含むように それはちょうどぬ (羣十三 77)あるが なる。 は一律に 他 俊成, 0 過去とな 一別する 5 語と比 であろ Ė しれ

然してそのずれは「トラホー目」式の対言語態度に 依るも意識と語法体系との間のずれにもとずくものと思わ れる。無意識的との相互関係にあり、その様態は中世初 期の語法類と文語(こゝでは歌の場合のみを考えた)とは意識 的と質料が少いのでやゝ独断に傾くかもしれないが、秘 伝の

同義別音の例でも公任から奥義抄の間にも和歌童蒙抄、俊頼口問題は先学の説く所であるし関係がないと思うので省略した。註一 とゝで同義というのは後述するように問題である。詞の病の

伝など説く所がある。

のと考えられる。

よる べと(は)いふなり、此事たゞよるべといふ詞にて歌になど有るあたりを云ふなり、無縁 にさ しは「な」れたる を僻案抄云、よるべなみーよるべとはたとへば立ちよりたのむ縁ずといふことばなれば云々(続々羣十二26)とばつねも人のいひならはしたることばなり、よしあしもしらとばつねも人のいひならはしたることばなり、よしあしもしら

こに極心へしてらくてります。(ま)1日こうかけでこうはうの、源氏物語に、賀茂祭よるべの水とよみたるは、社頭に神水を、ちかき世に、ものゝよしをしらず、古き事を見さとらぬももよみ詞にもかけば昔の人はうたがふこともなくいひ伝へたる

全集本によって例をひろうと、たとえば、助詞なむは大体次の正四、対訳例に乏しいから容易に結論はだせない。教長註から古典けるいふかひなき事なり、おなじ物語のかたはらの巻々をだに見ざりふかひなき事なり、おなじ物語のかたはらの巻々をだに見ざりるいふかひなき事なり、おなじ物語のかたはらの巻々をだに見ざりるがひない。

イタクフラナン→イタクフレ**47** イマモナカナン→ウチハエテナケ**32**

ようになる(数字は頁数)

マドハナン->フミタガヘテキタラムヲ82 (完全な対訳ではなツギテフラナン->ツギテフレ40

は次のように述べておいでになる。(「国語国文の研究」所収は→今は(定家)など。 教長註古今集に関して吉沢義則博士所は問題にならぬ。たとえば今シハ→今シバシ、(顕昭)今しいわば下知(命令)のなんである。又、比較する時異説があるナリナム→ナリネ91

識別するのは容易の業ではない。殊に今日の如く證本の得られかを知るのには無上の材料である。王朝の物語類から生死語を如何なる言葉が無くなってゐたか、意義が如何に変化してゐた「藤原教長著古今集註」一〇八頁)「然し、(教長註は)当時は次のように述べておいでになる。(「国語国文の研究」所収

書と註釈書とが最も都合のよい材料である」とゝに併せ記して ぬ時代では益々困難な事である。で、此の方面の研究には歌学

資意と敬意とを表する。

註五 愚秘抄については新板羣書類従十三巻解題 々木信綱博士日本歌学大系四巻解題を参照 (福井久蔵博士)。

註七 註六 古典註釈に現はれた語学的方法(日本文化叢考所収) 「座句ノテニハニテ連続タル、留メ」をさす。大概抄はすべ

て書下しにした。

顕昭、拾遺抄註に「アリニシ物ヲトハアリシモノト云フ詞ニ

死語化の傾向を推せられる。この「ぬ」は歌論にをはんぬとし れる事教長註の訳例にも、 正しい用法は勿論あるが、歌においても「つ」との混用がみら 二文字ヲクハヘタルナリ」 「に一が死語化する傾向をもちはじめた例と思われる。当代に その傾向がみられる事から「に」の (奉十三二) とある事は、 やはり

> 佐 遠 白 大 福

朋

また本学の鶴久、森山隆両先輩の御厚意を感謝申し上げます。 の御教示をいたゞいた春日和男先生に厚く感謝申し上げます。 本稿成るにあたり、終始御指導下さった福田良輔先生、

井

大 立

Ш

昭

郎

広島修道短大助教授 香川県主基高校教諭

Щ

本学助手 本学大学院学生 純心女子学園教諭 本学大学院学生 鹿児島大学講師

瀬 瀬

古 良 手 原

本学助教授 熊本大学教授 益 恒

金光学園高等学校教諭

福岡女子大教授

て扱われ、不のぬと区別せられた。

執 田 良 者 本学教授 介

内

初

筀

紹

荛